



東北地方太平洋沖地震の被災地で  
被災者とボランティアに関わる支援者向け

災害ボランティアセンターで活動する  
ボランティアコーディネーターのための  
事前研修テキスト

[Ver.1 緊急支援期用]



コンテンツ制作：長谷部 治  
編集：特定非営利活動法人日本ボランティアコーディネーター協会

©本テキストの無断転載を禁じます



## 0. 被災者主体の災害ボランティアセンターとは

### ▼ボランティアにもコーディネーターにも大切な3つの原則

#### 「被災者本位」「地元主体」「無理をしない」

新潟中越沖地震の際、柏崎災害ボランティアセンターが掲げた3つの原則

マスコミの報道などを見て大勢のボランティア活動志願者が被災地にやってくるようになると、私たちボランティアコーディネーターはどうしてもより多くのボランティアをどんどん被災者のもとへ送り出さなければいけないという気持ちが強くなります。その結果、ともすると被災者よりもボランティアの方に視線が向いてしまいがちです。日常はボランティアの依頼をする人(組織)とボランティア活動者との対等な関係を意識してつなぎますが、災害時は依頼者側が心身的にも経済的にも非常に落ち込んだ厳しい状態になっていますので、対等につなぐことを意識するあまり、結果的に対等でないという状況を生み出す危険性があります。

ですから、災害時のボランティアコーディネーションにおいては、ことさら「被災者本位」の考え方を心がけることが必要です。

また、物事の進め方や判断の仕方には、その土地ごとの基準や文化があります。外から訪れる者は、その土地の県民性や集落ごとのルールなどを十分理解して、それを尊重しなければなりません。発災直後はともかく、すでにさまざまな団体や個人が現地に入って支援活動していますので、積極的にやりとりをして、できる限りの情報を事前に収集して、現地に入ることが重要といえます。

私たちは応援団です。あくまでも「地元が主体」。地元のスタッフたちが住民の方を向いて支援活動ができるように、つぶれないように支えていくことが役割です。長く続いていくことですから「無理をしない」ことが大切です。

### ▼参考：災害ボランティアセンターの原則

#### 「被災者主体」「地元主体」「協働」

災害ボランティアセンター研修プログラム開発委員会報告書  
(全国社会福祉協議会)より



## 1. 「共感力」と「受援力」を高める

### ボランティアコーディネーターの重要性

ボランティア活動は被災地の方々を励まし、その復興につながるよう展開されなければなりません。そのためにはボランティアの被災者への共感力と自主性を高め、その力を発揮できるようなサポートが必要です。一方、被災者が「支援を受け入れる力（受援力）」を高めるようサポートし、多様なニーズを顕在化させることも大切です。

いま自分がつらい、厳しい状態のあるときに「助けて」ということがどれだけ勇気のいることかを理解すること。水害の場合には支援をしてもらう内容が共通することが多いため、「お隣がしてもらったなら、家もやってもらおう」となりやすいのですが、地震の場合にはニーズが非常に多様です。被災の状況だけでなく、被災者自身の心身の状況によっても違います。

今回の被災地で、この受援力を高める方法のひとつは「炊き出し」です。炊き出しは炊き出しに訪れたグループに集団として支えられる経験をします。私だけが特別なのではなく、被災した集団として支えられるということです。さらに炊き出しを手伝うという状況もよく見られ、そのうちに「実はね…」「大変なのよ～」という会話も生まれてきます。この集団で支えられる経験を通して、自分に家の手伝いとしてボランティアを受け入れるという受援力が徐々についてきます。ですから、まさにこの受援力をつける取り組みをいま意識的にやらないとならないのです。

これらの役割を果たすのがボランティアコーディネーターです。ボランティアコーディネーターは、ボランティアに命令したり、仕切ったりするのではなく、被災者とボランティアの新しい出会いとつながりを生み出し、その復興を支えていく重要な存在です。

#### <参考>

内閣府（防災担当）発行

防災ボランティア活動の多様な支援活動を受け入れる地域の『受援力（じゅえんりょく）』を高めるために



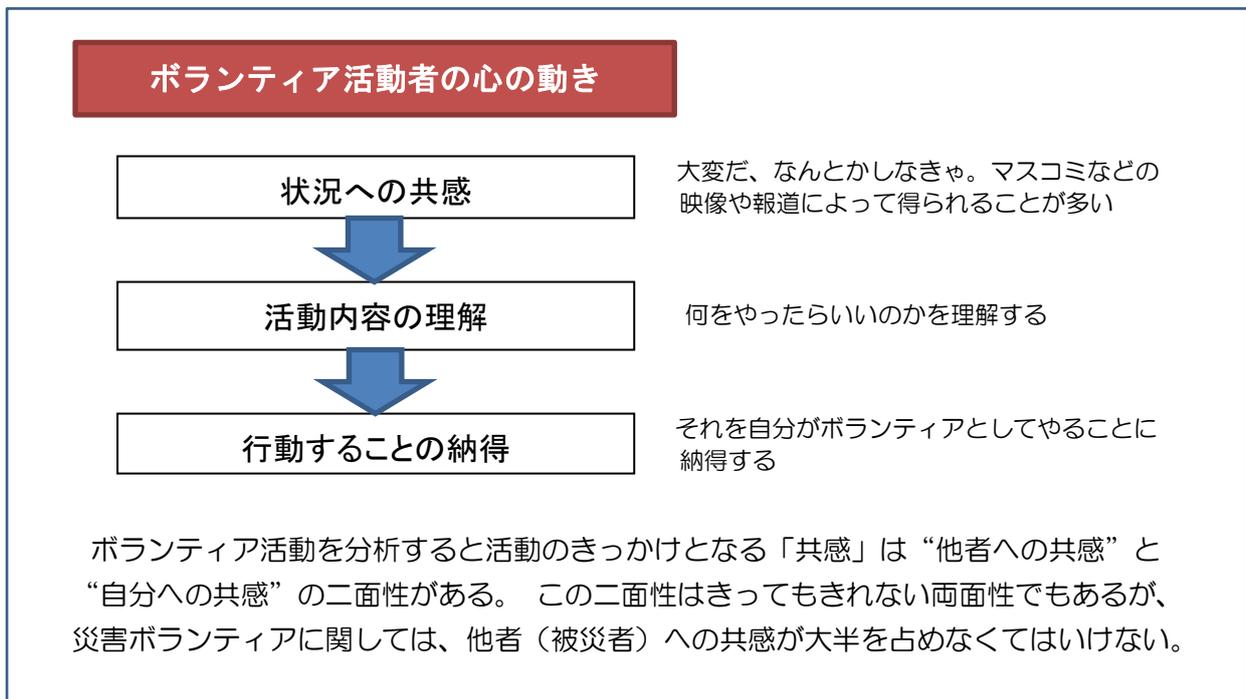


## 2. ボランティアは「派遣」されて行うものではない

ボランティア派遣という言葉を使っている社会福祉協議会も多いと思います。介護保険でホームヘルパーの派遣という言葉が馴染んだこともあり、派遣という表現がよく使われています。「派遣」という言葉にはだれかが命令してやらせるという意味がありますが、ボランティア活動は自主的に“共感”にもとづき無償で行うものです。誰かが「派遣」するものではありません。とりわけ情報が無い危機下においては、命令による「派遣」は指示待ちや依頼を受けたことしかやらないという状況を生み出します。

「ボランティア派遣」という発想ではボランティアの多彩さや機動性という長所を活かせません。マスコミや行政、ボランティアセンターの皆さんも、派遣という表現は避けてください。

次に、ボランティア活動をする人の心の動きについてです。



時間とともに被災地の状況は変化します。しかし、マスコミなどでは震災直後の映像を繰り返し流すことも少なくありません。かなりの時間を経過した時期に、初期の被災地の状況についての情報を得て、活動に赴いて来ることもあるのです。そのボランティア活動希望者が何に共感して被災地を訪れてきたのか、このこともボランティアコーディネーションのポイントになります。



### 3. ボランティアがたくさん来るから 仕組みが必要なわけではない

『泥をみないで人を見る』 水害の現場で生まれた言葉です。

被災者のためになるからと泥を片づけることに没頭するあまり、被災者を見ていないという状況が生まれます。

例えば、中途半端に終わるのは嫌だから、もう少しだからと、夜中遅くまで作業をしてしまうようなケース。ボランティアにとってはその日来たばかりかもしれませんが、その家の方はもう何日間も同じような作業の繰り返しで、今日ぐらいは早く眠りたいと思っているかもしれません。

また、空き地に泥水がたまっていて非常に臭いにおいがあるケース。だれも住んでいないので撤去の要請もなく作業対象ではありません。しかし、近隣の住民はその異臭に悩まされていて、生活もままならないとしたらどうでしょう。個別のお宅からの片づけよりも最優先してそれを撤去することも必要になります。常に被災者を見て、被災者の生活環境を見て、優先すべきことを決めなければなりません。

ボランティアがたくさん訪れるからそれを調整する“ボランティアセンター”という仕組みが必要なのでしょうか。“ボランティアコーディネーター”がいるのでしょうか。ボランティアセンターの仕組みは、かけつけたボランティアの共感を被災者のもとに確実に届けるためにあります。そして、忘れてならないのは、ボランティアやボランティアセンターの都合ではなく、被災者目線の支援を心がけること。

そういう意味では、ボランティアコーディネーターは、ボランティアは「お客様」ではなく、共に被災者支援に取り組む「パートナー」だという姿勢を持つことが必要です。

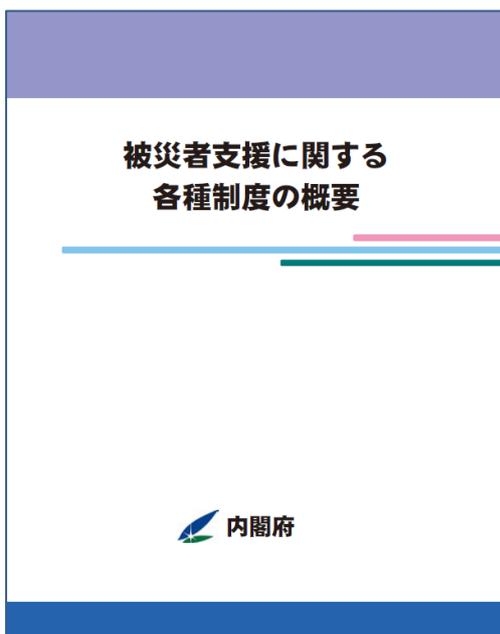
## ▼出発前に熟読しておきたい参考資料

■HP 「東北地方太平洋沖地震被災地支援活動」全国社会福祉協議会  
<http://www.shakyo.or.jp/saigai/touhokuzisin.html>

■ブログ 「ポケットのうらがわ」練馬区社会福祉協議会  
<http://blog.canpan.info/neriura>

■ブログ 「おつぼねの赤裸々日記」 柏崎市社会福祉協議会  
<http://blog.goo.ne.jp/ks-syakyou/>

■ツイッター 仙台太郎 @sendai\_tarou  
ついろぐ [http://twilog.org/sendai\\_tarou](http://twilog.org/sendai_tarou)



<http://www.bousai.go.jp/fukkou/kakusyuseido.pdf>